

第20回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム報告

実行委員長 生天目 博文 (広島大学放射光科学研究センター)

プログラム委員長 田中 健一郎 (広島大学大学院理学研究科)

第20回日本放射光学会年会・合同シンポジウムが1月12, 13, 14日, 広島市平和公園内の広島国際会議場にて開催された。広島で開催される大会としては6年前の2001年1月に開催された第14回(広島大学: 東広島キャンパス)に次ぐ2回目である。

今回の学会の参加者数555名, 懇親会参加者数285名, 口頭発表80件, ポスター発表274件, 特別展示39件であった。

特別講演では, 石川哲也氏(理化学研究所)と大隅一政氏(高エネルギー加速器研究機構)の両氏に, 「X線自由電子レーザーが拓く光科学のフロンティア」, 「結晶学と放射光」というタイトルでそれぞれ講演頂いた。X線自由電子レーザーの国家プロジェクトが始動し, 放射光科学の勢いを感じさせる講演であった(写真1, 2)。

企画講演では, 「乳ガン早期診断を目指す新マンモグラ

フィ開発」, 「界面の世界に光をあてる」, 「軟X線による気体原子・分子内殻励起実験技術の新展開」, 「放射光の産業応用」, 「シード光を用いた短波長コヒーレント光発生技術の現状と展望」, 「放射光の偏光特性及びそれを利用した内殻磁気光学の現状と展望」, 「放射光X線タンパク質構造解析のホライズン-高難度ターゲットへの挑戦」, 「放射光を利用した高分子材料・ソフトマテリアル研究の進展-ナノ制御界面の構造評価からダイナミクスまで」の8つの企画が採択された。4つのオーラル会場には, 多数の参加者があり, 活発な討論が行われた。

今回は, 特別企画講演が行われ, 理化学研究所と高輝度光科学研究センターが中心となって建設を進めているX線自由電子レーザー(XFEL)について, 「XFELプロジェクトこの1年」と題し, XFELプロジェクトの現状についてマシンから利用までの専門的な講演が行われた。

総会において学会賞授賞式が行われ, 学会長からメダルの授与が行われた。今年度は, 岡俊彦氏(慶応義塾大学理工学部物理学科), 野末佳伸氏(住友化学株式会社石油化学品研究所), 宮島司氏(高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所)の3氏が受賞された。総会后, それぞれの受賞者により, 「時分割X線回折法による紫膜の光反応過程の研究」, 「マイクロビームX線小角散乱法を用いた高分子材料の構造研究」, 「非線形共鳴近傍における位相空間中でのベータトロン振動の研究」の受賞講演が行われた。

今年で3年目になる日本放射光学会市民公開講座が国際会議ホール(S会場)で行われた。今年は, 放射光を広島市民に理解していただくことをテーマに「ためして放射



写真1 石川哲也氏の特別講演



写真2 大隅一政氏の特別講演



写真3 オーラルセッションの様子

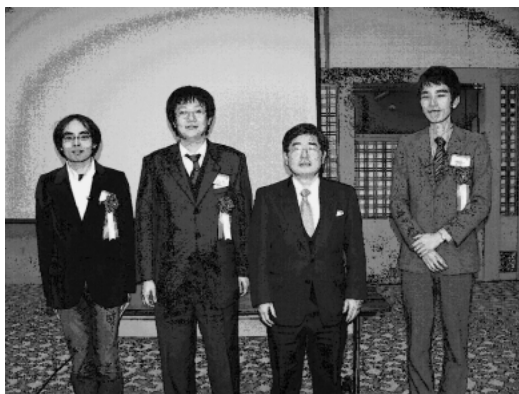


写真4 学会奨励賞受賞者(左から、宮島司氏、野末佳伸氏、雨宮会長、岡俊彦氏)のみなさん、おめでとうございます。



写真8 ポスター会場の様子



写真5 公開講座で質問をする物理大好きな高校生



写真9 特別展示・ポスター会場



写真6 公開講座終了後に展示物の質問に集まる生徒のみなさん



写真10 懇親会場での歴代会長による記念撮影



写真7 市民公開講座での演示実験での熱演



写真11 20周年を祝って広島樽酒で鏡開き

光」というタイトルで企画された。共催として広島大学理学研究科、工学研究科、HiSOR、また、広島県教育委員

会、広島市および東広島市教育委員会、マツダ㈱等の後援も得た。参加総数204名、うち一般参加が114名で、高校生からの質問や閉会后多くの高校生が標本や展示物に集ま



写真12 懇親会で歓談する参加者のみなさん

り講演者に質問する姿があった。

学生発表賞は今年で7回目を迎える。実行委員会による開票作業とプログラム委員会、学会行事幹事（組織委員長）への推薦の手続きを経て、受賞者7名が決定された。今回は、口頭発表80件の枠に120件をこえる申し込みがあり、1/3をポスター発表に移す編成が行われた。学生賞開票では口頭発表の得点が高く、今回は、4件を口頭発表から推薦した。学生賞については、今回の投票率が有権者の1/6と低いことから、今後、投票数を増やし、学生賞の価値をさらに高めていくことなどの改良が課題となっている。

懇親会は、学会会場から歩いて数分の厚生年金会館で開催された。6年前の広島大会でも懇親会のお世話をした懇親会担当スタッフ（田林氏、乾氏）の工夫により20周年のイベントに相応しい懇親会を持つ事ができた。歴代の学会長による記念撮影や鏡開き、懐かしい写真のスライドショーなどの企画もあり、総勢285名の参加者で賑わった。最後に、次回開催地の実行委員長である立命館大学SRセンター長 太田俊明教授から第21回大会（立命館大学）の紹介が述べられた。

今回、広島国際会議場で学会が開催されることになり、当初、会場費が問題となった。広島大学の西条キャンパスでの開催も検討されたが、ほとんどの参加者が市内から通うことになる事が予想され、交通費（往復約1700円）を含む諸費用を考えると、むしろ市内で開催した方が参加者



写真13 広島国際会議場前にて実行委員スタッフの集合写真。みなさんご苦労さまでした。

の負担を抑えることができるため、市内で開催し、参加費を1000円値上げさせて頂いた。実行委員会としては経費節減に取り組んだ。広島大学から可動式ポスターパネル95枚を持ち込み、パネル設営代を節約した。また、実行委員全員が当日会場係としてマイク係等を分担するなどして経費節減に努めた。今回の取り組みを通して実行委員間の絆が深まったような気がする。

市民公開講座班は、市民のみなさんにとって分かりやすい内容にするため、プロの司会者に協力を要請し、様々なアドバイスを頂いた。聴衆に見せるイベントとして出し物もいろいろと工夫し、高校生と一般市民を対象にした内容にするため何度もリハーサルを重ねた。二宮利男氏（SPring-8）には遠方から何度も足を運んで頂いた。住田弘祐氏（株マツダ）には自動車触媒の標本を持ってきて頂いた。司会者の玉田陽子氏（タマランズ）には聴衆と一体となる司会で場を演出して頂いた。今回の市民公開講座は当初の目標をほぼ達成することができ、市民公開講座班一同喜んでいる。年会在放射光施設と深く結びついた地域を巡る形で開催されている事を考えると、地元の高中生や市民のみなさんに放射光を理解して頂くことは、学会はもとより地元実行委員にとっても大変有意義なことではないだろうか。スタッフの間では、今回の経験を日頃の活動に活かしたいという積極的な意見も出されている。

最後に、報道機関や教育委員会等の県や市の皆様、広島国際会議場スタッフや会場設営の業者の皆様、学会開催にご尽力頂いた関係の皆様、そして実行委員、アルバイト学生の皆様に実行委員会を代表しまして感謝の意を表したい。